

## テモテへの手紙第一6章「言葉と富の高慢」

### 1A 主人に尊敬を払う奴隷 1-2

### 2A 健全な教えから離れた者たち 3-10

1B ことばの争いの病気 3-5

2B 金持ちになりたがる人 6-10

### 3A 永遠のいのちの約束 11-16

1B 信仰の戦い 11-12

2B キリストの現れ 13-16

### 4A 委ねられたもの 17-21

1B 今の世で富んでいる人たち 17-19

2B 間違った「知識」 20-21

## 本文

テモテへの手紙第一 6 章を開いてください。パウロが、これまでテモテに語っていたことのまとめのようになっています。それは、イエス・キリストが罪人を救うための来られたという真理とは違ったことを主張して、争いを引き起こしている者たちがいること。けれども、敬虔にかなった、健全な教えを守りなさいということです。6 章には、新しい話題もあります。金銭を愛することに対する警告があります。けれども、その新しい話題も、結局は、人々が高慢になっているということについては、言葉で言い争いをしている者も富んでいる者も共通の問題があるということです。

### 1A 主人に尊敬を払う奴隷 1-2

<sup>1</sup> 奴隷としてくびきの下にある人はみな、自分の主人をあらゆる面で尊敬に値する人と思わなければなりません。神の御名と教えが悪く言われないようにするためです。

パウロは、これまでも教会に対する手紙の中で、奴隷に対する勧めをしています。その都度、お話ししてきましたが、ローマ社会において奴隷は三割とも四割とも言われていました。パウロの、このような言葉を読んで、人々は、聖書は奴隷制度を容認しているのだと非難します。けれども、それは大きな間違いで、むしろその逆です。もし、仮にここで奴隷制度を廃止するべく政治的、力を行行使して動いて行ったらどうなるでしょうか？ 大きな内戦が起こり、血の海となるでしょう。いや、仮に成功したとしても、その支配者自身が強権になり、同じように民を虐げて行くことになります。

イエス・キリストの福音というのは、人がどのような存在であるかをよく知って、その上で根本的な解決を与えています。イエス様は、群衆からいろいろな質問を受けますが、その質問の背後にある、根本的な問題に光を当てられます。例えば、遺産相続のことで問題があるから助けてくれ、

と言った人に対して、「わたしは仲裁者ではない」と断られて、人がいかに貪欲であるかについて語っておられます。

奴隷制度というのは、神のかたち、人間的に言えば、人間の尊厳を踏みにじる制度です。人は、天地を創造した正しい神の奴隷であって、他の人の所有物ではありません。けれども、旧約時代にも奴隷がいて、律法で奴隷についてのおきてがありました。新約聖書でも、ローマ社会の奴隷制度を一見、是認しているように見えます。けれども、実は、奴隷制度の根本を破壊しているのが、福音なのです。「ガラ 3:28 ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男と女もありません。あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです。」神の前に、キリストにあって、奴隷も自由人もありません！

ですから、事実、ローマ時代の当時の教会では、奴隷と主人が共に神を礼拝している姿を見ることができたことでしょう。神を信じないローマ人がそこに入って来たら、目を丸くしたに違いありません。そして、奴隷が牧者で、主人がその中で信者であるということも起こっていたことでしょう。教会の中では、奴隷制度が完全に、根絶されているのです。現代でも、これは起こっています。インドでは、教会がどんどん建て上げられています。そして迫害も厳しいです。なぜか？それは、カースト制の不可触民とされている、差別されている階層の人々がイエス様を信じて行っているからです。そして、そうした階層の人たちが決して受けることのできない、教育を、教会の学校などで施しているからです。

福音が入ると、神のかたちが損なわれている制度に光が当てられます。その制度を潰す以上に、義が広がります。イエス様の実現された、イザヤの預言があります。「42:1-4 見よ。わたしが支えるわたしのしもべ、わたしの心が喜ぶ、わたしの選んだ者。わたしは彼の上にわたしの霊を授け、彼は国々にさばきを行う。彼は叫ばず、言い争わず、通りでその声を聞かせない。傷んだ葦を折ることもなく、くすぶる灯芯を消すこともなく、真実をもってさばきを執り行う。衰えず、くじけることなく、ついには地にさばきを確立する。島々もそのおしえを待ち望む。」主のなされていることは、一見、世界にある不正を容認しているかのように見えます。叫ばないし、言い争わないし、声も聞かせません。けれども、力で制する以上のことを行われます。全地にさばきを確立するのです。

ですから、一見、逆のことをしているように見えることで、実は義を確立することがあるのです。それが、ここでのパウロの勧めです。「自分の主人をあらゆる面で尊敬に値する人と思わなければなりません」ということです。主人を深く尊敬して、よく仕えることこそが、神の義をもたらすこととなります。イエス様の教えこそが、一見、逆のことをしなさいと命じていますね。敵について、愛しなさいと言われます。祝福しなさいと言われます。それをやったら、悪がもっとはびこるではないか？と思われます。いいえ、人々を敬い、良くしていくことが、ついにはその人が、神をあがめることになるかもしれないのです。王を敬って、仕えていたダニエルの献身によって、ついには、王が、イ

スラエルの神を認めたように、敬い、仕えることによって、反抗し、反発するよりも、はるかに大きなことができるのです。

そして、この手紙では、教会が戦いの場であることを教えていることを思い出してください。「神の御名と教えが悪く言われぬようにするためです。」サタンが、教会を人々がそしるよう仕向けていきます。そうした隙を与えないようにしなさい、というのが、パウロが、この手紙で何度となく行っていることです。神を知らない人にとって、もし私たちがキリストにある自由をもって行動しても、それは理解されないのです。

現代であれば、雇用、非雇用の関係に当てはめることができます。神の前では良いとされているものであっても、いや、その良いとされているものが、雇用者の願っていることと逆のことをしているのであれば、そしられてしまいます。例えば、就業時間に、祈りの時間を取りますと言って仕事を止めたらどうなるでしょうか？働いている時に、伝道をして、その働いている手を緩めたらどうなるでしょうか？これは、雇用者から盗みを働いているのと同じになります。仕事のために給料を払うのに、仕事をしていないからです。では、どのようにして、キリストの教えを雇用者に伝えることができるでしょうか？心を込めて働くことです。主人を尊敬することです。奴隷は、主人がいない時は怠ける傾向があるところで、それでも誠実に働いているのを見て、そこで、この人はキリスト者か？という話になります。

沖縄戦を描いた「ハクソーリッジ」という映画で、部隊でぼこぼこに殴られて、虐められる、キリスト者がいました。衛生兵でした。しかし、彼はものすごい勢いで、人々を助けて行きます。それで上官がついに誤り、深い尊敬を抱きます。「私は、あなたの神を信じていない。けれども、その神を信じているあなたを信じている。」としました。たとえ自分自身は信じなくても、キリストとはこのような方なのだと示すことができるのです。

<sup>2</sup> 信者である主人を持つ人は、主人が兄弟だからといって軽んじることなく、むしろ、ますますよく仕えなさい。その良い行いから益を受けるのは信者であり、愛されている人なのですから。あなたはこれらのことを教え、また勧めなさい。

ローマ社会の中では、先ほど話したように、主人がキリスト者、そして自分は奴隷だということがあります。その時に起こる誘惑が、ここです。兄弟だからといって軽んじてしまうことです。キリストの福音を知ったのだから、主人と奴隷というものはなく、一つになっている。少しぐらい怠けたからって、むちで打たれることもないだろうし、などと考えて軽んじてしまうのです。

これは、実際に起こりがちなんでしょうか？未信者の前だと、証しのためだからといって必死に働いても、すでに信者の人に対しては、多少、手をゆるめても、つまずかせることはないだろうと考

えてしまいます。事実、キリスト教会向けに宣伝している会社などが、その経営やサービスについて悪い評判が立つことはあるのです。そうであってはいけません。

主の教えは、「マタイ 5:41 一ミリオン行くように強いる者がいれば、一緒に二ミリオン行きなさい。」というものです。奴隷制度は、キリスト者の間は意味のないものであっても、事実、その兄弟に良くするのは、誠実に働いて収益を得るのに貢献することです。その会社が潤えば、そのキリスト者の経営者は教会のために、また慈善のために、献金をすることができるのです。

## **2A 健全な教えから離れた者たち 3-10**

こうしたことが、主イエス・キリストのことばであり、敬虔にかなう教えですね。しかし、こういったことに同意しない者たちがいます。

### **1B ことばの争いの病気 3-5**

<sup>3</sup> 違ったことを教え、私たちの主イエス・キリストの健全なことばと、敬虔にかなう教えに同意しない者がいるなら、<sup>4</sup> その人は高慢になっていて、何一つ理解しておらず、議論やことばの争いをする病気にかかっているのです。そこから、ねたみ、争い、ののしり、邪推、絶え間ない言い争いが生じます。

イエス様のことばが、健全、つまり健康であるのに対して、「議論やことばの争い」をしている者たちは病気にかかっている、と言っています。一見、正しいことを言っているように見えますが、午前礼拝でもお話ししたように、実を見るとよいです。「ねたみ、争い、ののしり、邪推、絶え間ない言い争いが生じ」しているかどうか？なのです。

牧者チャック・スミスは、著書の中で、議論を挑みかかって来る人たちに対して、こんなことを話していました。彼らは、聖書の知識を十分に使います。いろいろなみことばを使って、自分たちのように信じることを説得するのです。チャックは、みことばを議論や言い争いのために使うことを嫌いました。それで、彼らがみことばを引用した時、その引用したみことばには同意していますから、うなずいていたそうです。けれども、教会学校で、彼は、その立場は受け入れないということをはっきり言いました。自分たちのように信じたと思っていた彼らは怒り狂いました。教会を荒らして、出て行ったのではないかと思います。その話を讀んだ時に、私も、「みことばを、議論や言い争いの中で使う」ということが、とても嫌いです。

主の教えを、議論に打ち勝つため、言い争いのために使うことができるのは、その根っこにあるのが、「高慢」だということです。神のことばは、神のことばです！ 当たり前のことですが、神は、私たちの思いをはるかに超えたところにみこころを持っておられます。私たちは、神から教えられ、神に示されたことについては、真理を知っています。しかし、それは、神に示されているというところ

だけという慎み深さが必要であり、そうでないことは、神は敢えて隠しておられるのです。なぜなら、善悪を知る知識は神のみに属し、私たちは神に拠り頼むようにすることをみこころにしておられます。それなのに、あたかも自分が真理についてすべてを知っているかのように高ぶっているのに、自分の信じていることこそが真理であり、相手は間違っていると責めることができます。

<sup>5</sup>これらは、知性が腐って真理を失い、敬虔を利得の手段と考える者たちの間に生じるのです。

4 節でもパウロが言っているように、そういった人々は自分こそが理解していて、あなたは理解していないと言い張るのですが、実は何も理解してないのです。知らなければいけないことも知らないのです。そこでここ 5 節では、「知性が腐っている」と言っています。それから、そういった人々は真理を知っていると豪語しますが、実は真理を失っているのです。

どうして、そのようになってしまうのか？それは、「敬虔を利得の手段」と考えているからです。キリストに人々を導くのではなくて、自分自身に注目が集まるとか、利得があると思ってやっているのです。SNS の時代であれば、炎上させて、敢えて自分に注目させようとしている人であるとか。過激であればそれだけ、それを喜ぶ、趣味の悪い人たちが集まるでしょうし、反発する人々も集めることができます。主に関わることさえ、敬虔でさえが、利得の手段にしています。

## 2B 金持ちになりたがる人 6-10

そしてパウロは次に、文字通りの利得、すなわち金銭を愛する人々がいたようで、その問題を取り上げます。敬虔を、金儲けの手段にしているような者たちがいたことでしょう。また、エペソは裕福な町です。自分が富んでいることを良いことに、テモテに対して強く出ている悪い者たちがいたのかもしれませんが。商業的な目的が、福音宣教の中に入り込ませている者たちもいたことでしょう。人々に言い争いをしているということと、お金もうけをしているというのは、必ずしもつながっていない場合もありますが、ゆるくつながっている場合も多いです。

<sup>6</sup>しかし、満ち足りる心を伴う敬虔こそが、大きな利益を得る道です。

精神的に注目を集めたいという利得もそうですし、実際に金銭を集めたいという利得もそうですが、そこに横たわっている問題は、「心に不足を感じている」ということです。自分が人々から認めてもらえないというような思いが強いのかもしれません。また、今の自分の環境に不足を感じているかもしれません。それで、ますます自分を売りに出さないといけないと思っているかもしれません。そこでパウロは、「満ち足りる心は、大きな利益をもたらすのだよ」と励ましているのです。

今の自分は、神の恵みによってそうなっているのだという満ち足りる必要があります。私には、これは足りない、あれが足りないと言っている時に、実は、これがある、あれもあると、恵みを数えること



ができます。そして、主に召されていることを行っているという確信には、深い、満足した思いが当てられます。何も問題がない平和があるところに、わざわざ、「炭火に炭を、火に薪をくべるように、口論好きな人は争いをかき立てる。」ということをしませす(箴言 26:21)。

<sup>7</sup> 私たちは、何もこの世に持って来なかったし、また、何かを持って出ることもできません。

これは、満ち足りる道を知るのに、とても良い知恵です。私たちが赤ん坊の時に、裸ではなく、お金をもってお母さんのおなかから出てきたのでしょうか？いいえ。そして、棺桶の中に入る時に、世界では、遺族がお金さえ入れることがあります、持っていくことはできるのでしょうか？いいえ、ヨブが言ったように、「私は裸で母の胎から出て来た。また裸でかしこに帰ろう。」なのです(ヨブ 1:21)。私たちが、何か自分の生活で不足を感じる時に、思い出してください。今の自分がいるのは、もっぱら神の憐れみに拠るのだということです。

<sup>8</sup> 衣食があれば、それで満足すべきです。

パウロは何も、貧しくなりなさいということを教えていません。満足しなさいということを教えています。ピリピ人への手紙で、この満足する心得を教えていますね。「ピリ 4:12-13 私は、貧しくあることも知っており、富むことも知っています。満ち足りることに飢えることに、富むことに乏しいことに、ありとあらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。私を強くしてくださる方によって、私はどんなことでもできるのです。」自分を強くしてくださる方、つまり、神とキリストです。この方に会って、自分は満ち足りていることを知ります。

<sup>9</sup> 金持ちになりたがる人たちは、誘惑と罠と、また人を滅びと破滅に沈める、愚かで有害な多くの欲望に陥ります。<sup>10</sup> 金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。ある人たちは金銭を追い求めたために、信仰から迷い出て、多くの苦痛で自分を刺し貫きました。

いろいろな誘惑、罠、滅びと破滅をもたらす欲望は、金銭を愛するところから来ます。ここで大事ななのは、金銭そのものが悪ではないことです。金持ちになりたがる人であり、金銭を愛していることが、問題なのです。今、この世にある悪で、金銭に関わらないものはほとんどないのではないのでしょうか？巨大なポルノ産業があるのは、もちろん巨額な利益を得られるからです。今、アメリカで児童の人身売買を暴露する映画が、キリスト教を背景にしている映画ですが、それがとても流行っています。今現在、児童の人身売買が大規模に、広範囲に行われています。なぜ、そんなことをするのでしょうか？お金になるからです。

ここで再び大事ななのは、お金の額ではないことです。信仰から迷い出た人たちが、すでにパウロの時代にいました。その人たちには、大金持ちを目指していたのではないと思います。満ち足りな

い心というのは、比較から来ているからです。年収億単位の人に対して、私たちは妬みません。年収が自分よりも 1.5 倍の人であるとか、少し自分よりもお金を持っている人を、うらやましくなります。比較して、競争してしまうのです。そうして、自分ももう少し設けたいと願って、それで信仰から離れて、痛い思いをするのです。

### **3A 永遠のいのちの約束 11-16**

このようにして、ことばの言い争いにしろ、富んでいることにしろ、エペソの教会で影響力を持つようとしている中で、テモテに強く励ましの言葉を与えます。

#### **1B 信仰の戦い 11-12**

<sup>11</sup>しかし、神の人よ。あなたはこれらのことを避け、義と敬虔と信仰、愛と忍耐と柔和を追い求めなさい。

「しかし、神の人よ。」と言っています。これは、アブラハムに、ダビデに、その他、敬虔に生きようとしていた人々に付けられた呼び名です。テモテに対して、神の恵みによってそのように呼んでいるのです。

そしてしなければいけない第一のことは、「これらのことを避け」ることです。他の箇所でも、そうした言い争いしている者たちに関わるのではなく、その逆で、避けることを教えています。「ロマ 16:17 兄弟たち、私はあなたがたに勧めます。あなたがたの学んだ教えに背いて、分裂とつまづきをもたらす者たちを警戒しなさい。彼らから遠ざかりなさい。」避ける、遠ざかるというのは知恵なのです。無関心でいなさい、ということではありません。むしろ、「警戒しなさい」とあるように、警戒していないと、いつのまにか、そうした人々の汚れによって自分も汚れていってしまうからです。いつの間にか、悪いことに自分も加担するようになってしまいます。だから、警戒しながら、避けます。

そして、「追い求めなさい」と勧めています。積極的に、能動的に、ここに書かれている、義、敬虔、信仰、愛と忍耐を選び取ります。私たちにある問題は、消極的なことです。何も語らなければ問題が起こらない、責任はないと思っています。そうではなく、すでに洪水のように、違ったことを言う人々がいるのです。ですから、私たちは能動的に、これらのものを求めます。求めるだけでなく、追い求めるのです。

「正しさ」は、自分が完璧であるというような意味ではありません。それは律法主義の危険があり、むしろ私たちを汚します。それは、神の義であり、また人との正しい関係です。困っている人々の支えになることも正しさです。そして、「敬虔」は神へに対する敬いがあり、人に対しても敬いがあるということです。そして献げている姿です。そして、「信仰、愛と忍耐と柔和」です。信じるという能動性があり、それが愛によって裏付けられたものであり、そして愛と信仰には忍耐が付き物で

す。そして、人との関係において相手から何かされたとしても、敢えて仕返ししない柔和さも必要です。これらが主目的であり、第一のものとし、最優先にしていきます。

<sup>12</sup> 信仰の戦いを立派に戦い、永遠のいのちを獲得しなさい。あなたはこのために召され、多くの証人たちの前で素晴らしい告白をしました。

午前礼拝で学びましたが、私たちの戦いは信仰の戦いです。第一にしなければいけないものを第一にしていく、優先順位の戦いです。正しさ、敬虔、信仰、愛、忍耐、そして柔和というのは、すべて大事なことです。そうではないものに私たちの注意をそらすものが、あまりにもたくさん、周りにあります。そうではなく、大事なものを大事にしていく、優先させていくという戦いがあります。

そして、その戦いにこそ、永遠のいのちがあります。心が信仰のうちにあるからこそ、私たちは永遠のいのちを今、楽しむことができ、また後にその報いを受けるのです。私たちは、自分たちの状況を変えようと躍起になってしまいがちですが、大事なものは、信仰です。箴言の言葉があります。「箴 4:23 何を見張るよりも、あなたの心を見守れ。いのちの泉はこれから湧く。」

そして、「あなたはこのために召され」とあります。神から召されたと知っている人は幸いです。問題を起している人々は、神から召されたという確信が薄いことが特徴です。自分で何かやり始めるのですが、何のためにしているのかが分からなくなり、それで、不必要な対立を作ることや、お金になるようなことにそれで行くなど、信仰から離れてしまうのです。

そして、「多くの証人たちの前で素晴らしい告白をしました」と言っています。これが、按手を受けた時に告白したことなのか、それとも、バプテスマを受けた時に告白したことなのか、分かりません。けれども、人々の前で、しっかりと告白したことは、大きな力となります。「ルカ 12:8 あなたがたに言います。だれでも人々の前でわたしを認めるなら、人の子もまた、神の御使いたちの前でその人を認めます。」御使いが認めるのですから、その人にとって大きな力となるのです。

## 2B キリストの現れ 13-16

次に、イエス様の模範をパウロが書いています。

<sup>13</sup> 私は、すべてのものにいのちを与えてくださる神の御前で、また、ポンティオ・ピラトに対して素晴らしい告白をもって証しをされたキリスト・イエスの御前で、あなたに命じます。

イエス様は、十字架判決を受けられる時に、素晴らしい告白をされました。ピラトの前で、ご自身がユダヤ人の王であることを告白されました。「ヨハ 18:37 そこで、ピラトはイエスに言った。「それでは、あなたは王なのか。」イエスは答えられた。「わたしが王であることは、あなたの言うとおりで



す。わたしは、真理について証しするために生まれ、そのために世に来ました。真理に属する者はみな、わたしの声に聞き従います。」これは、ご自分の国がこの世のものではないことを語られた後で、語っておられます。しかし、ローマ皇帝によって総督になっているピラトに対して、ご自身が圧倒的な主権者であり、王であることを告白しているに等しいです。そして、十字架でさえが、ピラトの権限にあるのではなく、ご自身の父から来ていることを証しておられます。「ヨハ 19:11 上から与えられていなければ、あなたにはわたしに対して何の権威もありません。ですから、わたしをあなたに引き渡した者に、もっと大きな罪があるのです。」このように、主は、ご自身が召されていること、つまり全知全能の神の御子であることを、しっかりとピラトの前で告白されていました。

そして、なぜ、神のことを「すべてのものにいのちを与えてくださる神」と呼んでいるかと言いますと、ご自身はよみがえられることを知っておられたということです。主が、いのちを捨てられても、それを取り戻すことを知っておられました。そして、よみがえらえて、それから、ご自身が神の御子であることを公に現すことも知っておられました。

<sup>14</sup> 私たちの主イエス・キリストの現れの時まで、あなたは汚れなく、非難されるところなく、命令を守りなさい。

主イエス・キリストが現れる時に、テモテもまた、主にあつてよみがえり、そして、栄光の姿に変えられて、また、その姿で主と共に世に現れるのです。「コロ 3:4 あなたがたのいのちであるキリストが現れると、そのときあなたがたも、キリストとともに栄光のうちに現れます。」ですから、しっかりその時まで、汚れなく、非難されるところなく、命令を守りなさいとパウロは教えています。汚れがない、非難されるところがないというのは、内面においても傷、罪や悪が留まっていることがないように、公においても、人々の目に見えるところで、非難されるところのない者であるようにいなさい、ということです。

<sup>15</sup> キリストの現れを、定められた時にもたらしてくださる、祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、<sup>16</sup> 死ぬことがない唯一の方、近づくこともできない光の中に住まれ、人間がだれ一人見たことがなく、見ることもできない方。この方に誉れと永遠の支配がありますように。アーメン。

キリストが現れる時に、ローマ帝国をはるかにしのぐ、大いなる御国が到来します。そして、皇帝をはるかにしのぐ方が支配されます。当時、彼らが生きていたのはローマ帝国であります。欧州、中東、北アフリカの全域支配していた、巨大な帝国です。皇帝は、救世主と呼ばれていました。また神の子と呼ばれていました。皇帝こそが、我々を救い、皇帝が平和の君だとみなされました。しかし、キリストははるかに偉大で、優れた主権者があらわれ、私たちがこの方に仕えています。

一つ一つ、呼び名を見てみましょう。「祝福に満ちた唯一の主権者」であります。先ほど、この世

における富を愛する者たちがいるということができましたが、いいえ、この方こそが祝福の源です。それから、「唯一の主権者」でられます。この世には王と呼ばれる者たち、指導者、主権者と呼ばれる者たちがいます。しかし、この方のみが全てを支配されている方です。さらに、「王の王、主の主」とあります。これは、どんな世界帝国の王が世界を牛耳っていようと、その王はまことの王の操り人形でしかないことを意味しています。

「死ぬことがない唯一の方」とあります。数々の王は、どんなに権勢を誇ろうとも滅んでいきました。しかしこの方は不滅でられます。そして、「近づくこともできない光の中に住まれ、人間がだれ一人見たことがなく、見ることもできない方」と言っています。主の栄光の御座があります。そこには誰も近づくことができません。黙示録 4 章には御座の幻がありますが、そこは宝石の輝きがあっても、姿かたちが出てきません。そして誰も見ることもできない方であり、モーセは、わずかに後姿の栄光のみを見ました。しかし、キリストは見ていました。「ヨハネ 1:18 いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。」

#### 4A 委ねられたもの 17-21

このように頌栄が終わったのですが、パウロは、念を押すように、テモテに繰り返して注意を与えています。

#### 1B 今の世で富んでいる人たち 17-19

<sup>17</sup> 今の世で富んでいる人たちに命じなさい。高慢にならず、頼りにならない富ではなく、むしろ、私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置き、

今の頌栄を見るように、主ご自身が祝福に満ちた方であり、今の富がいかに頼りにならないかを教えています。富というのが、「高慢」にさせることと関わっています。富があると、私たちが何かを持っているという高ぶりを生じさせます。しかし、満ち足りた心であれば、自分がいかに、すべての物で神が豊かに与えて楽しませてくださっているか、その神に期待するのです。

<sup>18</sup> 善を行い、立派な行いに富み、惜しみなく施し、喜んで分け与え、<sup>19</sup> 来たるべき世において立派な土台となるものを自分自身のために蓄え、まことのいのちを得るように命じなさい。

キリスト者の富に対する姿勢です。自分に任されている財産は、自分が楽しむことができるものであるけれども、それを人の益のために用いていくことは大きな喜びになります。福音の働きのために献げること、また慈善行為に献げることです。その人が、いかに富を愛するところから離れているかを見る指標は、繰り返しますが、貧しくなっているかどうかではありません。どれだけ、気前よく献げているかどうか？であります。

そして、私たちの将来設計の話をしています。大抵、老後設計までをするのがこの世であります。しかし、キリスト者は老後の先、「まことのいのち」のための設計を立てます。この未来があるので、今の内に良い基礎を築き上げていくことに力を入れるのです。老後のことの設計を考えることも大事ですが、それ以上に、死後の世界、主が来られる時の神の国についてのことを考えたほうが良いのです。

## 2B 間違った「知識」 20-21

<sup>20</sup> テモテよ、委ねられたものを守りなさい。そして、俗悪な無駄話や、間違っ「知識」と呼ばれている反対論を避けなさい。<sup>21</sup> ある者たちはこの「知識」を持っていると主張して、信仰から外れてしまっています。恵みがあなたがたとともにありますように。

これがこの手紙での、最後のまとめであります。「委ねられたものを守りなさい」であります。テモテは、新たに何かを造り出す必要はありません。守るだけあります。主イエス・キリストの福音、神の救いのご計画について、それを純粋に守り、維持し、保持するだけです。なぜなら、私たちが何か生み出すのではなく、まさに福音そのものから、永遠の命に至る生ける水が湧き出るのであって、また神の御国の力の現われがあります。私たちの役目は福音を福音として、無傷のままにしていこうということあります。

違った教えとしてエペソに入り込んでいたのは、「俗悪な無駄話や、間違っ「知識」と呼ばれている反対論」でありました。敬虔にかなっていないものは、すべて俗悪です。無駄な話です。そうしたものを避けます。そして、「知識」とパウロが言っているのは、ギリシア語ですとグノーシスです。グノーシス主義は、「私たちには神からの知識が特別に与えられていて、他の者たちには明らかにされていない。」とする、霊的エリート主義であります。元々の考えは、神は肉体には関わる方ではなく、霊と肉を分離する二元論です。

しかし、キリストは肉体を持ってこられました。知識と呼ばれているものの危険性は、私たちが肉体の限界を持っている中で交わっていないことです。第一ヨハネには、そういった者たちが反キリストであると、ヨハネがはっきりと言っています。人と人のキリストにある交わりから離れて行った者たちです。そして、ことばだけで論じて行き、知識で圧倒して、人にある弱さや憐れみというのが欠けている者であります。そういった者たちは、どんどん、神が肉体を取られたという信仰から離れて行きます。

それで再び、避けなさいとパウロは命じています。ゆだねられたものを守ることに専念して、警戒しながら、そういったものに関わるなと命じています。そこに、神の恵みがあります。パウロは、「恵みがあなたがたとともにありますように。」と言っていますね。私たちも、主から任された信仰を守っていくことに専念しましょう。